

複文構造を持つ 2 種類の日本語存在文の比較対照

1. 問題の所在

存在文の研究において、(1)のような連体修飾された名詞を存在動詞「ある」が取る例は検討されているが、主名詞が形式名詞「こと」である(2)の下線部のような例は「こと」を補文標識とする補文を主文に埋め込んだ複文と考えられ、存在文としての検討が少ない。

- (1) 落としても絶対壊れないコンピュータもある。(金水 2006: 19)
 (2) 作品を見たいということもあるけれど、それ以上に映画館が好きなんです。(雑誌: 柄本明 1989『てんとう虫』)

(2)の下線部は、ある俳優が頻繁に映画館へ行く理由を述べている部分で、因果関係の「因」に当たる。つまり、この部分だけで解釈が成立しないという不完全さを特徴のひとつとする。また、(3)や(4)の「こと」とは異なるが、存在文に「こと」が生じる点が共通している。

- (3) 僕はトルコへ何回も行ったことがある。／トルコに出張することが多い。
 (4) 同じように悩み抜いたからこそ、虎井さんには言えることがある。(聞蔵: 2010-03-08)

(3)のような完了相の「たことがある」や、対立する「ることがある」も、形式的には名詞節が存在文に埋め込まれているが、単文での解釈が妥当なまでに文法化が進んでおり、存在文とは別に研究がなされている。(4)は実質的な「こと」であるため、解釈は(1)に準じ限定修飾を受け、(2)や(3)のような名詞節というよりは、名詞句(下線)を作っている。

(2)(3)(4)はこの形式的な類似のために、区別に文脈を要する場合が多いが、「ことがある」の単位に再分析された後に意味拡張したとは考えにくい。むしろ「こと」の統語的環境としての存在文という見地に立ち、「こと」で名詞化された名詞節を持つ存在文に、なぜ(2)や(3)のような「原因・理由」や「経験・未実現事態の実現頻度」などの構文的意味が創発するのかを、存在文の特徴に還元して考察すべきである。本発表では特に(2)のような原因・理由を表す存在文について、(3)のような経験その他を表す構文と比較対照し、特徴付ける。

2. 分析

通構文的な比較対照を行う。まず、「こと」が〈事態〉であるか〈事実〉であるかによって、存在文の解釈に違いが生じることを検証する。(3)のタイプに生じる「こと」は、〈事態〉(行為、出来事、現象)、(2)のタイプに生じる「こと」は〈事実〉(事態が真であるという話者の判断を含むこと)である。仮に前者を「事態の所有を表す存在文」、後者を「事実を挙げる存在文」と呼ぶ。

「事態の所有を表す存在文」に生じる「こと」は事態を表し、時間概念を解釈領域とする。典型的には人や物の過去や未来という時間概念を利用するが、特定の人物などではない場合に、時間的特定性も失われ一般化する。時間軸上の事態の発生時や発生回数を問題とするためル・タ形の対立があり、また回数や頻度を表す副詞句が共起できる。さらに「ある」を「多い」などの数量を表す述語に置き換えることもできる。上述の(3)がプロトタイプ例で、「行った { ϕ / *という} こと」のように「という」を介在させることはできない。また「行った {こと/ *の} がある」のように「の」に置換できない。

一方、(2)や以下の(5)は「事実を挙げる存在文」で、(5)の波線部「背景」の具体例が「こと」によって名詞節となり、存在動詞「ある」で挙げられている。

- (5) 新作長編小説「1Q84」の出足が好調な背景には、村上春樹さんの国際的な注目度が数年前で大きく上がったことと、久しぶりの長編ということがある。(東京: 2009-6-6)

時間概念を直接解釈領域としないため、ル形もタ形も生じるが意味的な対立はない。頻度副詞や回数とも馴染まないが、「ひとつには～ことがある」のように個数は生じうる。このため「こともある」のように累加の「も」(前田 2006)が出やすい。「ある」の代わりに「多い」ではなく「大きい」のような大きさを表す述語も使われるため、空間的な概念を利用していると言える。また、「こと」固有の意味が希薄になり「こと」専用文ではなく、「こと・の」両用文になっている。さらに、「上がった { ϕ / という} こと」のように任意で「という」を介在させられるが、事態を表す修飾部分(波線)と、事実を表す「こと」との間に概念のレベル差が生じ、両者の意味関係を明示する「という」がある方が解釈しやすくなるためと考えられる。

3. 結論

「事態の所有を表す存在文」は所有概念が存在文で符号化される所有文に分類され、一方の「事実を挙げる存在文」は前文・節に対する「原因・理由」と解釈されるため、ベースとプロフィールを持つ空間的な存在文から、限量的な存在文を概念的に仲介したリスト存在文(西山 2003 など)に分類されるべきであると主張する。経験は所有者に帰属し、原因や理由は相対的に結果を要求するといった、帰属性、相対性の点からそれぞれ説明できると考える。

<主要参考文献>

- Croft, William. 2001. *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Fauconnier, G. 1997. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (坂原茂, 田窪行則, 三藤博訳 2000. 『思考と言語におけるマッピング

- グ：メンタル・スペース理論の意味構築モデル』、東京：岩波書店)
- 堀江薫、プラシヤント・パルデシ 2009.『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ—』(山梨正明編、講座認知言語学のフロンティア 5)、東京：研究社.
- 金水敏 2006.『日本語存在表現の歴史』、東京：ひつじ書房.
- 久野暉 1973.『日本文法研究』、東京：大修館書店.
- Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: OUP.
- 前田直子 2006.「原因・理由の暗示的累加を表す従属節—こともあって・ことだし—」、藤田保幸、山崎誠(編)『複合辞研究の現在』、大阪：和泉書院. 87-102.
- 益岡隆志 2009.「連体節表現の構文と意味」、『月刊言語』38 卷 1 号、東京：大修館書店.
- 舩山洋介 1995.「文末の「コトダロウ」における「コト」の意味分析」名古屋・ことばのつどい編集委員会編『言語の変容(日本語論究 4)』、大阪：和泉書院.
- 西山祐司 2003.『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』、東京：ひつじ書房.
- 野田春美 1995.「ノとコト—埋め込み節をつくる代表的な形式—」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類語表現の文法(下) 複文・連文』、東京：くろしお出版.
- 寺村秀夫 1992.『寺村秀夫論文集(1) 日本語文法編』、東京：くろしお出版.

< 例文出典(括弧内は本文中での記載方法) >

聞蔵Ⅱ ビジュアル(聞蔵) / 日経テレコン 21(日経) / 東京・中日新聞記事データベース(東京)(中日) / 大宅壮一文庫雑誌記事検索索引 Web 版、財団法人大宅壮一文庫(雑誌) / 新潮文庫 100 冊 CD-ROM、新潮社(新潮)